

3. 宗教関係者との連携

日本においては「宗教は人生にとって非常に重要である」と答える人の割合は約5%と低いレベルにあり、宗教の公的影響力は弱いといわざるを得ない。

しかしながら、生活困窮者や複雑な問題を抱えていたり、避難を余儀なくされた人々などに対して食料や住まいの提供を行ったり、自死遺族の支援を行っている宗教組織や信者のグループも数多くあり、複雑・困難な背景を有する人々への支援や自殺総合対策において、宗教が果たす役割は少なくないと考えられる。

この領域に関して、宗教、あるいは宗教関係者が果たせる役割は多々あるだろうが、その主ものは右記の7つであろう。

【宗教が果たせる7つの役割】

- ① 空間としての場
- ② つながりを築く場
- ③ コミュニティーのまとめ役
- ④ 宗教儀礼を通じての支援
- ⑤ 教えを通じての支援
- ⑥ 寄り添う伴走者
- ⑦ リスクへの気づきと情報伝達経路

【役割の実際】

① 空間としての場

寺院や教会を利用して、サロンや集いといった支援の場が形成される。介護者カフェ、遺族の集い、子ども食堂、自助グループのミーティングなどである。

公民館等の公共施設と比較して、宗教空間の“非日常性”は、世間体から逃れ、負担感を軽減し安らぎを与える「**アジール(アサイラム)**」としての機能が強いという特徴がある。

② つながりを築く場

檀信徒組織は一種の支え合い、互助機能を有している。また、祭りや神事などの催しで人が集うことが、問題発見や相談、支援の入り口にもなりうる。

③ コミュニティーのまとめ役

宗教者はコミュニティの中心的存在を担うことが多く、地域内でのリスクの早期発見、専門機関への連絡、連携の要として機能しうる。

④ 宗教儀礼を通じての支援

法要、礼拝、典礼などへの参加という実践体験が救いや癒しとなる場合もあれば、参加者から宗教者に悩みの相談がなされることもある。

葬儀や法要を形骸化させず遺族に寄り添ったものとする事で、遺族の力になりうる。

⑤ 教えを通じての支援

ほとんどの宗教が、いかに苦しみを減ずるかという道を説いているので、苦しみや困難を抱えている人に対して、有効に機能する可能性は高い。

また、宗教は死を取り扱ってきた長い歴史があり、その点で遺族支援において果たす役割は大きい。

★ 用語解説

・アジール(アサイラム) …………… p104

⑥ 寄り添う伴走者

治療的な立場には立たず、世俗的価値観から外れているという宗教者ならではの伴走が可能である。いわゆる、**スピリチュアル・ケア**ができる可能性がある。

近年、日本型**チャプレン**(布教を目的としない宗教者、臨床宗教師)の育成も行われている。

⑦ リスクへの気づきと情報伝達経路

宗教者が檀信徒の変化や危機を感じ取る意識を持つことで、日々の宗教活動の中でリスクの早期発見につながることもある。月参りや自宅での法要では、家の最深部まで入ることができる貴重な機会となるし、墓参りや礼拝のついでに何気ない立ち話などで、悩みや愚痴などが出ることも少なくない。

また、檀信徒同士の付き合いの中で、リスクの早期発見につながる場面もある。

自死遺族支援において、発生直後の葬儀などで遺族に接する宗教者の果たす役割は大きく、宗教者の態度次第で、遺族に不要かつ大きな精神的ダメージを与える場合もあれば、大きな救いとなったり、必要な情報の提供や、支援につなげることもできる。

【宗教関係者との連携における考え方】

《連携する際の留意点》

- 支援のきっかけとなりうる「気づきの場」の一つとしてとらえておく。
- “非日常的”で“世間体から逃れられる”という雰囲気(「アジール機能」)を大事にする。
- あくまでも、対象者にとっての別の選択肢として情報提供する社会資源ととらえ、相談を丸投げすることはしない。
- 個人情報の取り扱いには慎重にする。個人情報を提供する場合は、本人の同意を得ることを原則とする。あるいは法的に守秘義務が課せられるような公的な協議会(自立支援協議会、要保護児童対策地域協議会等)などを利用する。
- 日頃よりの交流につとめ、先方が担える役割や、逆に先方が当方に求めている機能などを把握しておく。

宗教者、宗教組織、宗教施設は、保健所や各種相談センターなどのように支援を必要としている者への支援活動を主目的とはしていないものの、活用可能な社会資源の一つである。

複雑・困難な背景を有する人々への支援や自殺総合対策において、宗教関係者と何らかの連携を持つておくことは極めて有用と思われるが、連携する際の留意点としては、左記のようなものがある。

★ 用語解説

- ・スピリチュアル・ケア p105
- ・チャプレン p105

関係者からの一言



小川有閑
大正大学地域構
想研究所主幹研
究員／浄土宗蓮
宝寺住職

宗教は、リスクを発見する「気づき人」「気づきの場」にも、リスク者を支える支援者にも、十分に成り得ます。

宗教施設の空間・時間の非日常性、世俗とは異なるモノサシを示す宗教の教えは、人間関係や社会のなかでの「べき論」にがんじがらめになっている人たちにとって、シェルターの役割を果たせるでしょう。

宗教の教えには、思うがままにならない人生の苦しみや悩みを克服するための智慧が豊富に蓄積されていますから、苦難に直面した人の心への支援となるはずで。

政教分離とは、自治体が特定宗教に利益を供することを禁ずることであり、包括ケアの一員に宗教が入ることを禁ずるものではないはずで。しかし、現実には、「支援 → 布教」という懸念も拭えず、障壁となっていることは否めません。宗教側には、社会資源としての自覚を持ち、誤解を与えぬ自制が求められます。

個人情報の保護の問題も、実は宗教者には刑法で守秘義務が定められており、こうした理解を深めていくことも重要なことと思います。

課題を克服しつつ、各地域で、高い意識を持った宗教者と他の支援者が連携を深めていくことを期待します。